



発行所

一般社団法人 全日本木材市場連盟
編集・発行人 東京都区文京区小塚1-7-12
電話 03(3818)2906
FAX 03(3818)2907
毎月1回1日発行
定価 年3,000円
(会員は会費に含まれています。)

30年全市連総会表彰者決まる

平成29年度全市連功労者会長表彰(25名)については、3月12日(月)に開催した全市連功労者表彰審査選考委員会で決定し、5月21日(月)開催の第63回総会・東京大会の席上で表彰状を贈呈する。また、感謝状推薦選考委員会で選考された農林水産大臣(3名)及び林野庁長官感謝状受賞者(10名)についても総会席上で感謝状を贈呈する予定。受賞者の皆様の御労苦に敬意を表すと共に、心よりお慶び申し上げます。受賞者の方々は次のとおり。(敬称略 順不同)

(会長表彰)

- 「東北」佐藤綾(ナイス(株) 宮城市場)、
「関東北」遠藤和憲(福島県郡山地区木材製材(協)、江幡清美(株)茨城木材相互市場、篠崎忠明(株)宇都宮総合木材市場、石橋文男(株)宇都宮総合木材市場)、中田秀一(千葉県木材市場(協)、貝沼良英(ナイス(株)新潟市場)、「関東」後藤美恵子(東京木材市場(株)、菊地實(東京木材市場(株))、「東海」小澤俊卓(ナイス(株)沼津市場、磯絵里(ナイス(株)沼津市場、「近畿」福田愛弓(株)大阪木材相互市場、「中国」母里英男(株)勝山木材市場、「佐藤友道(真庭木材市売(株))、「四国」川西奈津子(株)太洋木材市場、「九州」佐藤了弘(株)伊万里木材市場、梶原誠(株)伊万里木材市場、赤星徹(上益城木材事業(協)、鶴田啓介(肥後木材(株))、五島幸典(大分県木材協同組合連合会)、矢羽田邦彦(株)九州木材市場、長谷部敬(株)九州木材市場、「阿蘇」伊藤之一(材惣木材(株))、宮島克己(飯南木材(株))、浅野俊光(有アサノ銘木)

平成29年度木材アドバイザリー養成講習結果

当連盟は、4月2日(月)、東京都文京区の日本森林林業振興会会議室で、「木材アドバイザリー審査委員会」を開催した。委員会には、岡野健東京大学名誉教授をはじめ委員全員が出席し、「平成29年度木材アドバイザリー養成講習会」の受講者について試験結果等をもとに、資格審査を行い、合格者74名を決定した。合格者の氏名は、全市連のホームページにも掲載する。また、問い合わせがあれば、名簿の提供を行う。合格者は、以下のとおり(敬称略 五十音順)。

- 相澤貴宏(福島県、阿部士(北海道)、新井健太(東京都)、栗竹正大(愛知県)、石井剛志也(埼玉県)、石津浩二(大阪府)、石原力(岐阜県)、市川大介(東京都)、伊藤宏司(千葉県)、伊藤正雄(大阪府)、井上十志幸(兵庫県)、井上英勝(北海道)、井上遼太郎(東京都)、今村俊史(熊本県)、岩城尚子(大阪府)、植松公洋(静岡県)、梅田恭央(熊本県)、大川原貴志(新潟県)、大澤健太郎(東京都)、岡島甲(静岡県)、小田野紀芳(東京都)、柿本美樹枝(神奈川県)、奈川県)、加藤秀一(愛知県)、狩野明広(東京都)、鎌田菜々子(福島県)、川又正人(岩手県)、岸田真志(富山県)、久保田翔(長崎県)、熊木秀幸(東京都)、黒原崇正(岡山県)、慶伊靖浩(富山県)、高力直(鳥取県)、小林裕治(滋賀県)、是澤卓(愛媛県)、嵯峨直人(秋田県)、坂下浩哉(福島県)、桜木摩耶(愛知県)、佐藤憲司(福島県)、佐藤博文(熊本県)、柴田誉(岐阜県)、白熊和登(千葉県)、

平成29年度第4回木材需給会議開催

平成30年3月19日、林野庁は「平成29年度第4回木材需給会議」を開催し、「主要木材の需給見通し」を策定・公表した。

見通しの要点

- 1. 平成30年第2四半期(4~6月)の需給は、国産材製材用丸太及び国産材合板用丸太は、前年同期に比べ増加する一方、合板は前年同期と同程度で、輸入丸太、輸入製材品及び構造用集成材は、前年同期に比べ減少する見通し。
2. 平成30年第3四半期(7~9月)の需給は、国産材製材用丸太、国産材合

板用丸太及び合板は、前年同期に比べ増加する一方、輸入丸太、輸入製材品及び構造用集成材は、前年同期に比べ減少する見通し。

3. 平成30年度の新設住宅着工戸数は、貸家を中心とした減速が見込まれる一方、消費税率引き上げ前の駆け込み需要等も予想され、前年度に比べ同程度と見込まれる。

II. 主な意見の概要

1. 一般経済の動向

2017年度の実質GDP成長率は前年比+1.8%と3年連続でのプラス成長が見込まれ、2018年度も景気の回復は続き、実質GDP成長率は前年比+1.2%と4年連続でプラス成長を達成すると思われ、オリンピックを控えたインフラ建設などの需要の盛り上がりや、首都圏での再開発案件の増加などが景気の押し上げ要因となる。海外経済の回復の継続を受け輸出の増加が続く、設備投資は、企業業績の拡大を背景に人手不足への対応のための投資や研究開発投資の増加が続くと予想され、個人消費も底堅さを維持する見込み。

2. 住宅着工見通し

2017年の住宅着工は96.5万戸、前年96.7万戸に対し△0.3%と僅かながら前年割れ。住宅着工を牽引してきた貸家着工は、相続税対策の一巡等をはじめ、空室率上昇や新規貸出減など調整要因による減少続き、建築費や労務費の上昇等から持家着工も減少が続いた。直近2018年1月の住宅着工は6.6万戸で前年同期比△13.2%の大幅減と

なったが、前年に五輪関連選手村着工があり、分譲マンション中心に大幅減となった背景の一つ。超低金利による住宅取得能力の押し上げ効果はあるが、建設資材や労務費等コスト上昇、天候不順や地政学リスクなど不安材料も漂う中、着工の足取りは徐々に重くなってきた。民間の予測では、2017・2018・2019年度は、90万戸台半ばから前半との見方が主流も、想定は一樣でなく、2018・2019年度に向けて増加を見込む見方も。二次速報公表後、下方修正した機関も。各種住宅関連支援策の下支え効果、新たな相続・贈与に関する資産関連税制の影響など注視が必要。

3. 国産材丸太(製材用)の動向

平成29年第4四半期実績は、降雪の影響、外材供給に不安ある中、全国的に好調な荷動き、引き合い強く、前年同期比増。需要が比較的高いところ、落ち着き、引き続き価格も強含み傾向と予想。30年第1四半期は、需要底堅い状況が続く、外材の供給状況が変わらなければ、前年同期比増、第2四半期は、プレカットの受注残の状況等から、急激な需要減少は想定しにくいとの期待多く、前年同期比増、第3四半期は、外材供給状況が鍵で、林野庁のJAS構造材普及促進事業による無垢材利用広報活動等も浸透し、関心も高まる可能性、前年同期比増の見通し。

4. 国産材丸太(合板用)の動向

平成29年第4四半期実績は、堅調な住宅着工、国産材合板へのシフト、輸入合板の減少傾向、フロア合板等への国産材合板の需要増、型枠用合板の需要増、南洋材合板等に関する違法伐採等の環境間

「主要木材の入荷量等の概要」

単位：千m³、(%)

	国産材丸太		輸入丸太	輸入製材品	合板	構造用集成材
	製材用	合板用				
26年計 (実績)	12,211 (101)	3,191 (106)	4,086 (91)	6,430 (84)	6,297 (97)	2,137 (95)
27年計 (実績)	11,835 (97)	3,358 (105)	3,359 (82)	6,132 (95)	5,656 (90)	2,030 (95)
28年計 (実績)	12,378 (105)	3,714 (111)	3,579 (107)	6,460 (105)	5,835 (103)	2,191 (108)
29年第1四半期 実績	3,113 (98)	893 (98)	833 (84)	1,599 (100)	1,541 (106)	594 (119)
29年第2四半期 実績	3,125 (99)	1,006 (104)	851 (93)	1,695 (103)	1,505 (104)	606 (109)
29年第3四半期 実績	2,870 (98)	971 (109)	844 (107)	1,621 (99)	1,491 (103)	624 (109)
29年第4四半期 実績	3,171 (101)	996 (106)	739 (84)	1,549 (98)	1,577 (107)	609 (108)
29年計 (実績)	12,279 (99)	3,866 (104)	3,267 (91)	6,464 (100)	6,114 (105)	2,433 (111)
30年第1四半期 見込み	3,150 (101)	990 (111)	872 (105)	1,574 (98)	1,522 (99)	550 (93)
30年第2四半期 見通し	3,200 (102)	1,030 (102)	835 (98)	1,636 (97)	1,501 (100)	580 (96)
30年第3四半期 見通し	3,100 (108)	1,060 (109)	775 (92)	1,594 (98)	1,521 (102)	600 (96)

(単位：千m³、%) (括弧内は前年比又は前年同期比)

題、国内合板工場のフル稼働、合板工場の生産能力、効率のアップにより前年同期比増。30年第1四半期は、前期要因により、前年同期比増、第2四半期は、前期要因に加え、新設合板工場の稼働で、前年同期比増、第3四半期は、前期要因により前年同期比増の見通し。

5. 米材丸太需要動向

平成29年第4四半期実績は、前年同期

比減。北米産地で夏場のファイヤークロージャー後の影響で伐採減少した上、好調な米国住宅着工需要に支えられ、丸太・製品価格共に高騰、対日輸出価格も大幅上昇、日本では需給、在庫とも大幅縮小。30年第1四半期は、前期の影響もあり、米材需給は逼迫気味、内外価格共に強含みで推移、先高観から買い気旺盛、前年同期並需給、在庫水準に戻る予想も、

前年同期比で減、第2四半期は、夏場住宅着工需要期で、前年並需要規模に回復、値上げ一服、保合い、前年同期比増、第3四半期は、例年若干、国内需要は落ち込み、前年同期並見通し。毎年のように森林火災対策の伐採規制があり、今年も注意が必要、入荷量次第では、相場弱保合いに転ずる可能性。

6. 米材製材品需要動向

平成29年第4四半期実績は、入荷が少なく、原木不足し、前年同期比減。この傾向は30年の春先まで続くと思。30年第1四半期は、現地原木価格高値が続き、製材工場は高くても材を確保しなくてはならず、先高見込んでの需要出ると予想され、前年同期比で増、第2四半期は、北米の伐採正常に戻り、出材増が予想、アメリカ最大手の原木業者も、値上げ見送りで同値のオフアとなるも、アメリカ国内需要が過熱といえるほど順調で、日本向け原木増えず、前年同期比減、第3四半期は、現地在庫回復し、買い難さはなくなるが、後半の不安は、住宅着工数頭打ちで、大きく減ることないが、消費税増の増税決まっても、仮需が出るには早く、前年同期比減の見通し。戸建、マンションとも価格はこれ以上あげられる状況になく、建築需要も厳しくなると心配。

7. 米材、欧州材、北洋材、輸入集成材の供給動向

(1) 米材丸太供給

平成29年第4四半期実績は、伐採量頭打ち状態で、カナダ国内工場の需要旺盛になり、輸出材確保出来ず、前年同期比大幅減。30年第1四半期は、前同様、

輸出材確保出来ず、カナダの数量大幅減少見込まれ、前年同期比減、アメリカは原木価格上昇し、アメリカの森林オーナーの伐採意欲掻き立てられ、若干数量増、第2四半期は、カナダ国内工場の在庫数量正常に戻り、カナダの数量回復し、アメリカの数量も若干増加、前年同期比増、第3四半期は、通年通りファイヤークロージャーの影響で数量減少、前年同期比減見通し。

(2) 米材製材品供給

平成29年第4四半期実績は、アメリカ市況の高騰の煽り受け、前年同期比減。30年第1四半期は、1月の入荷量前年同月比△9・2%、前年同期比減、第2四半期は、需要シーズン、前期より増も、引き続き北米市況値上がりで思うような数量購入出来ず、前年同期比減、第3四半期は前年同期程度予想。北米市況次第も、高値・需要タイトで思う様に購入出来ない状況継続と思われる。

(3) 欧州材製材品供給

平成29年第4四半期実績は、羽柄材等完成品減少も、ラミナ中心の入荷、前年同期比増。30年第1四半期は、1月入荷量前年同月比△9・8%、北欧・バルトは暖冬の影響で減少、前年同期比減、第2四半期は、暖冬の影響及び好調な他国市場へ目が向き、円安・国内価格の頭打ち感あり、前年同期比減、第3四半期は、前期要因により前年同期比減少見通し。

(4) 北洋材製材品供給

平成29年第4四半期実績は、中国中心に他国市場良く、対日向け入荷減、前年同期比減少。30年第1四半期は、1月入荷は前年同月比+18・4%と順調、前年

同期比増、第2四半期は、寒波の影響、他国市場良好で入荷伸びず、前年同期並、第3四半期は、内地価格天井感、他国市場勢いあり、対日向魅力減少、前年同期比減見通し。

(5) 輸入構造用集成材供給

平成29年第4四半期実績は、好調なRW中断面需要背景に前年同期比増。30年第1四半期は、RW中断面の入荷のズレ生じ、1月入荷は前年同月比△7・7%、市況悪く、管柱大幅減、前年同期比減、第2四半期は、WW管柱の低迷継続、RW中断面価格高く需要一服、旺盛な買付無く、前年同期比減、第3四半期は、前期要因により前年同期比減の見通し。

8. 南洋材製材品等の需要動向

(1) 南洋材丸太(製材用) 需要

平成29年第4四半期実績は、供給に見合った出荷、前年同期比減。30年第1四半期は、1月出荷3,277m(前年同月比95・5%)、原木出材不足続き、丸太入荷限られ、前年同期並、第2四半期は、入荷減、価格上昇続き、在庫少ないが、供給に合わせた需要になり、前年同期比減、第3四半期は、供給に見合った需要予想され、前年同期並見通し。

(2) 南洋材製材品需要

平成29年第4四半期実績は、住宅着工減少傾向も、非住宅の動き良く、前年同期並。30年第1四半期は、1月出荷38、277m(前年同月比83・6%)、年度未完工物件多く、前年同期並、第2四半期は、住宅以外に店舗やリフォーム物件、カウンターや棚板等で底堅い需要、前年同期並、第3四半期は、オリンピック関連、非住宅の動き、住宅着工に大きな落

ち込み無ければ、前年同期並見通し。

9. 国産、輸入合板の需要動向

(1) 国内製造合板需要

平成29年第4四半期実績は、住宅着工数7月より連続前年比減の推移、九州等で在来工法の面材体力壁用途構造用合板増加、フローリング用針葉樹合板等の非構造用途需要も堅調増加で推移、前年同期比増。30年第1四半期は、住宅着工数は第1四半期も前年比減で需要減少要因も、針葉樹構造用合板の面材耐力壁や非住宅用途、非構造用でフロア合板、型枠合板用途向け拡大一層進み、前年同期比増見込み。東北・北海道など降雪の影響大きく中小工務店の引き合い落ち着いている。九州地区は構造用合板の引き合い変わらず強い、第2四半期は、住宅着工数は賃貸減少などの影響を受けるが、大手プレカット工場などは4月から平常加工を計画、4月から予定される新規生産拠点稼働で、フロア合板など非構造用途需要支え、前年同期比増、第3四半期は、住宅着工数前年比水準に回復、建築基準法の一部改訂により非住宅分野での建築物木造化も追い風、用途拡大一層期待され、オリンピック需要も遅れていた合板型枠などの使用は、第2・3四半期に顕在化し、前年同期比増の見通し。

(2) 輸入合板需要

平成29年第4四半期実績は、サラワクの伐採率引上、丸太出材不足の中、駆込発注分が集中入荷、待ち望んだ需要家への出荷となり、前年同期比増加。30年第1四半期は、当初、前期の集中入荷の反動予想も、フロア合板ファルカタ合板のコンテナ入荷多く見られ、前回予想よ

り増も、前年同期比減、塗装型枠合板や薄物・中厚合板などの品薄感強いものは、出荷が入荷水準に対応、品薄感の弱い生型枠合板等は、一部在庫となる、第2四半期は、丸太出材不足に加え、期間中ラマダンなど生産落ちる要素、供給は減少、不足感のあるアイテムは変わらず強い引合い続き、前年同期並、第3四半期は、丸太不足の中の生産に加え、他地域への供給の価格メリツトのため、日本向け供給増加は厳しい環境続き、輸入合板需要は品薄アイテム中心に衰え見えず、入荷量水準は出荷されてゆき、前年同期比増見通し。

10. 国内製造合板供給

平成29年第4四半期実績は、堅調な住宅着工、国内合板工場のフル稼働、輸入合板の減少傾向、産地違法伐採対策等環境問題の影響、フロア合板用国産材合板の需要増、国産材合板の生産能力、効率のアップ等により前年同期比増。30年第1四半期及び第2四半期は、前期要因により前年同期比増、第3四半期は、前期要因により前期並みの見通し。

■「建築基準法改正案」閣議決定

平成30年3月6日、建築基準法の一部を改正する法律案が閣議決定された。

1. 改正の背景の一つとして、「木材を建築材料として活用することで循環型社会の形成や国土の保全、地域経済の活性化に貢献することが期待されており、近年の技術開発も踏まえ、建築物の木造・木質化に資するよう、建築基

準の合理化が求められている」旨記述されている。

2. 改正の概要の中で、「木造建築物の整備の推進」が、柱の一つとなっており、

具体的には、以下のとおり。

(1) 耐火構造等とすべき木造建築物の対象の見直し（高さ13m・軒高9m超→高さ16m超・階数4以上）

(2) (1)の規制を受ける場合（高さ16m超・階数4以上）についても、木材をそのまま見せる（あらわし）等の耐火構造以外の構造を可能とするよう基準を見直し

(3) 防火・準防火地域の門・塀（2m超）における木材の利用拡大（不燃材料とすること→一定の範囲で木材も利用可能とする）

■経済団体の林業の成長産業化に向けた宣言・提言等

1. 「林業復活・地域創生を推進する国民会議」（会長 三村明夫）は、平成

30年3月に宣言を発表し、「国産材の需要を高めていくため、「国としての大きな仕掛け」と「小さな積み重ねと実践」を産官学連携して推進すべきとした。概要以下のとおり。

(1) 国としての大きな仕掛けとして
ア 再造林を可能とする山元への利益還元
イ チェーン最適化

イ 若い世代の林業就労促進や安全な環境確保、地域ごとの森林管理のための人材育成

ウ 大規模・中高層建築の木造化、針葉樹の高強度化や工業製品化などの技術革新
エ 国産材など木材需要（公共・民間建築物等）の拡大を一層加速させる法制度の整備

(2) 小さな積み重ねと実践として
ア 広葉樹も含めた森林資源の活用とその実現のための仕組みづくり（山の価値最大化）
イ 商工会議所会館など地域活性化の拠点への木造・木質化の推進

2. 「経済同友会」は、平成30年3月に「地方創生に向けた、需要サイドからの森林改革」日本の中高層ビルを木造建築に！を公表した。

その中の主な提言は、次のとおり。
・企業（施主）―木の良さを理解し、木造建築を積極的に採用する。
(1) 経営者自ら、木を使うことの環境への効果や従業員への効能について正しく理解する。

(2) 企業行動として木造建築を採用することの位置づけを整理する。投資家に対する開示資料にも、国産材使用方針について記し、公表する。
(3) 自社物件について、国産材の利用拡大（建築・内装）を図る。

(4) 創意工夫に富んだ広報・マーケティング等に注力し、国民の間に、国産材利用に向けた共感・ムーブメントを醸成する。
(5) 木造建築に対する理解度向上や意識改革を経営者／担当者に促す機会を設ける。

雑記帳

中国は広く、長い歴史を誇る国である。河北・中原の新石器時代の住居址は多くが堅穴式穴居だが、揚子江下流の河姆渡遺跡では、6千〜7千年前に、柱、根太梁、床板などが柄（ほぞ）・柄穴加工され、仕口結合を用いた木造高床建築技術があったと考えられている。戦国時代には木造の横架を主体とする建築が確立し、漢代以降主流を占め、日本の宮殿・社寺建築の原型になったといわれている。しかしながら、度重なる戦乱等により、歴史上名高い秦の始皇帝の阿房宮、漢の武帝の未央宮、唐代長安の大明宮等はいずれも失われてしまった。それでも伝統形式の木造建築は、建設され、明、清両王朝の紫禁城、天壇など著名な木造建築も数多く残っている。日本の木造建築の大先輩とも言える中国であるが、近年の木造建築技術は、停滞し、近代的木造技術は、北米から入ったツーバイフォー工法だけであったが、今回の木構造設計規範改訂において、日本の木造軸組構法を基本とする軸組構法が盛り込まれ、日本のスギ、ヒノキ及びカラマツが強度等級を与えられ、構造材として使用できることとなった。ここまでは師匠に恩返しできた、弟子の話として誇らしい所であるが、中国で何故、日本の軸組構法（主に現し）が求められたか中国の学識者に聞くと、ツーバイフォーでは、せつかく木材を使っても木が見えないのでつまらない、そうである。木が見えない木造構法が当たり前となっている、木の文化の国において、木材に係わってきた者としては、複雑な思いがある。